



2/1

防災タウンウォッチングが「第3回防災活動大賞」 中心メンバーが都竹市長へ受賞を報告

防災について学んできた小中学生や高校生らが、実際に町中へ出向き、防災を肌で体験する取り組み「防災タウンウォッチング」が、「第3回防災活動大賞」（清流の国ぎふ防災・減災センター主催）で大賞を受賞したことを受け、関係者が市役所を訪れ、都竹市長へ受賞と活動内容の報告をしました。

企画や進行を手がけた手嶋さんは「プログラムの汎用性に気をつけて（大賞の）プレゼン内容などを作ったので、そこをしっかりと評価されて、ほっとしました。受賞は嬉しいですが、次の展開を考えていかなければ」と気をひきしめていました。

プログラムの作成などに協力した防災士の北平さんは「活動を知って『面白そう。教えて』と興味をもってくださった方も多くみえました。裾野が広がっていく可能性を感じています」などと話されました。



2/3

鉦山資料館の早期リニューアルなどを要望 地元経済団体などが地域振興策など求める要望書を提出

神岡商工会議所の亀谷豊会頭とNPO法人神岡・町づくりネットワークの鈴木進悟理事長が都竹市長に対し、神岡町城ヶ丘にある鉦山資料館（高原郷土館）のリニューアルの早期実現などを盛り込んだ要望書を手渡しました。

同館を楽しく学べる新たな集客拠点としてリニューアルする施策の早期実現、集客力のある道の駅宙（スカイ）ドーム神岡の機能強化、ガッタンゴーや江馬氏館跡公園、坂巻公園との連携を強化する施策などについて要望されました。

都竹市長は『鉦山のまち・神岡資料館』といったような、文化を伝える機能にウェイトを置いた施設を考えている。しかし、合併特例債がない今、財源が大きな課題。補助金やふるさと納税をうまく使いながら、費用の見通しが立ってから進めたい。企業版ふるさと納税の呼びかけなど、ご協力をお願いしたい」などと話しました。



2/3

災害時等における協力体制に関する協定を締結 飛騨古川青年会議所と飛騨市社会福祉協議会、市が連携

飛騨古川青年会議所と飛騨市社会福祉協議会、市の3者が、災害時等における協力体制に関する協定を締結しました。

今回の協定では、平常時には情報の共有や連携体制の強化をはかり、災害が発生した時には、市が行う復旧活動や、市社協による災害ボランティアセンター運営などの応急対応活動について、同青年会議所が協力することなどを定めています。全国へ支援をつなげていただくことも期待されます。

協定締結式では、同青年会議所の齋藤憲一理事長、市社協の白川孝裕会長、都竹市長が出席し、協定書にサインを交わしました。

齋藤理事長は「事前に協定を結び、普段から情報交換をしながら良い関係を築いておけば、有事の際にも迅速な対応ができると思います。市を支える青年経済人として、今後とも市の発展に寄与していきたい」と話されました。



2/4

取 吉城高校生が「YCKプロジェクト」の活動報告 り組みを通じて得たそれぞれの学びを発表

古川町上気多の吉城高校が進めている課題解決型キャリア教育「YCKプロジェクト」の活動報告会が、飛騨市文化交流センター・スピリットガーデンホールで開かれました。

生徒らは、和光園での清掃活動や小学生への学習サポートなどのボランティア活動、夏休みに実施した飛騨市長による特別補習での学びといった「YCK課外活動プログラム」の他、地域の大人と語る会や防災授業など「総合的な探究の時間」や、E S D(持続可能な開発のための教育)での取り組みを発表。オンラインで配信しました。

発表を聞いた岐阜大学教職大学院の長倉守准教授は「飛騨のひと、もの、ことを理解することから取り組んで」「魅力や課題の背後にある問題の複雑性をきちんととらえてほしい」「答えは1つとは限らない。自分ならではの答えを模索して」などとアドバイスされました。



2/12

友 コロナ禍でもオンラインで安心・安全の交流会 好都市の台湾・新港郷に古川の魅力を発信

飛騨市と友好都市の台湾・新港郷をリアルタイムでつなぐ「台湾・新港郷交流オンラインツアー」を行いました。新型コロナウイルス感染拡大で行き来できなくなったため、市が初めて企画し、新港郷の皆さんに冬の瀬戸川や古い町並みなど古川町の魅力を楽しんでもらいました。

この日、台湾からは林茂盛郷長をはじめ、新港文教基金会関係者や公募した市民ら約70人が参加。市職員で通訳案内士の桂川丹奇さんがマイクを握り、都竹市長や古川祭保存会も参加し、オンラインで町内の紹介やゲームを行いました。

瀬戸川と白壁土蔵街、渡辺酒造店の酒造りの工程などの見学、特産品や飛騨の薬草の紹介がありました。約2時間にわたる交流の後、林郷長は「楽しい企画をありがとうございました」とお礼の言葉を述べられました。



2/14

河 卒業証書を山中和紙で 合小6年生が恒例の紙すき

卒業式を間近に控えた河合小学校の6年生10人が、河合町角川のいなか芸芸館で伝統産業「山中和紙」の紙すきを行い、世界に一つだけの卒業証書づくりに取り組みました。

児童たちは、手すき和紙職人の柏木一枝さんから和紙の原料や作り方を学んだ後、一人ひとり柏木さんの手ほどきを受けながら紙をすき、乾燥機で乾かして完成させました。

無事にできあがって胸をなでおろした板屋茜之介君は「桁が結構重く、動かして厚さを均等にするのが難しかった。自分で書いた卒業証書がもらえると思うと、とてもうれしいです」、水川春太郎君は「6年間の思い出のこもった卒業証書を自分で作ることができてよかったです」、土田結夢さんは「桁が重く、思うように水が切れませんでしたが、何とか仕上げました。苦労して作ったので、卒業式が楽しみ」と話し、笑顔を見せていました。





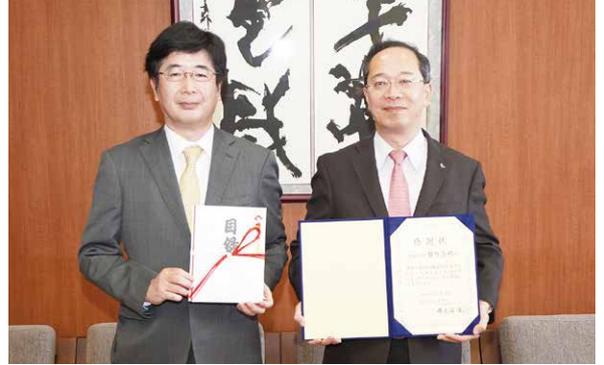
2/14

東北大学の宇宙物理学研究を寄附で支援

神岡町で最先端の宇宙物理学研究を行っている東北大学ニュートリノ科学研究センターに対し、ふるさと納税を通じて寄せられた寄附金の贈呈式が市役所で行われました。

市は、ふるさと納税の仕組みを活用した寄附でさまざまな団体や事業を応援するメニューを設けています。昨年新たに設定した東北大学に対するメニューには約7900万円の寄附が寄せられ、このうち返礼品の購入や手数料などを除いた額の3割にあたる1190万円を寄贈することになりました。

この日は、都竹市長が東北大学ニュートリノ科学研究センター長の井上邦雄教授に目録を手渡しました。井上教授は「想定外の金額に驚いています。若手研究者の海外での研究活動など、特に人材育成の充実に活用させていただきます」などと話し、感謝の言葉を述べ、都竹市長に感謝状を渡されました。



2/25

古川小6年生がプロのギタリストとオンライン交流

カメラ 特レポ

古川小学校6年生と、同校卒業生でプロギタリストとして活躍する野村陽一郎さんとの「オンライン交流」が開かれ、卒業を控えた児童たちに歌とメッセージを贈りました。

野村さんは、2005年に音楽ユニット『二千花 (にちか)』を結成し、2007年にメジャーデビュー。現在は、アイドルグループ「日向坂 46」の『ドレミソラシド』をはじめとした楽曲の作曲や編曲などを手掛けられています。

野村さんは、学校での思い出やこれまでの経験を紹介。「どんな些細な事でも体験することが大切」などとアドバイスしました。児童たちは「夢を持って生きたいと改めて思いました」「私もピアノをやめたいと思ったことがあります、野村さんのお話を聞いて将来に生かしてみたいと思います」「今日のお話を僕の生き方につなぐことができればいいなと思いました」などと感想を述べていました。



2/28

今年度の人権推進校の神岡小学校へ感謝状を贈呈

んだ思いやりの心、地域へ広がって

令和3年度に「人権推進校」に指定され、人権意識を高める活動に取り組んだ神岡小学校に対して、岐阜地方方法務局高山支局の干場昌幸支局長から感謝状が手渡されました。

今年度は、神岡小学校の児童らが「人権の花運動」として、前指定校から引き継いだヒマワリの種を育てたり、同校で開催された車いすバスケットボール体験教室で障がいのある方への理解を深める取り組みなどを行いました。

児童を代表して5年生の新野陽斗さんが、次の指定校である尾崎小学校の皆さんに対し、「きれいな花を咲かせて、また次の学校に引き継いでいってください」とメッセージを送りました。また、同じく高平結生さんがこれまでの活動を振り返り、「準備や計画は大変だったけれど、神岡町内の施設へヒマワリの種を渡しに行った時、たくさんの方が喜んでくださって、とても嬉しかったです」などと語りました。

